

念願叶って潰れそう
潰れないかなんか喫茶店を開い
たらなんかにさされたんだ
メの舞台にさが？

ラビリンス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アルバイトの女の子に「これじゃあこの店潰れちゃいますよー」とか言われながら喫茶店経営したい！

……そう思ってたらなんか違う形で夢が叶う事になった。

あるいはアニメ「リコリコ」を見てたらなんか思いついた作品とも言う。

目次

プロローグ	1
最初の出会い	4
久方ぶりの戦い	9
迎田茜という少女	16
ワンマンアーミー	27
謎の少女 A	34
二人のアルバイト	43
それぞれの陰のお話	53
裏のお話	62
強欲の残滓	69

プロローグ

この世界に転生してから既に20年余りが経つ。

それまでに幾度となく修羅場を経験してきた。

時代や世界観的には現代社会ではあったが、この世界の裏側には『アンノウン』と呼ばれる化け物を操る組織『プレデター』が存在していた。

裏社会とはいえ、それは現実的な脅威としてテレビで放送される事もあったし、日常的な危険として生活を脅かす明確な敵だった。

その存在を知った時、俺はピンときた。

ああ。

これが、俺が転生した理由なのか、と。

実際俺がこの世界に転生した時、一つのチート能力を授かった。

どうして普通の現代社会に転生するだけなのにこんな物騒な能力を貰うんだと思っていたが、これは『アンノウン』と対峙するために必要だったのだろう。

『ラプラスブレイド!!』

「変身ー!」

かくして俺は、『アンノウン』と戦うヒーロー『ラプラス』となって彼等との戦いに至った。

——戦いは俺が15歳の時から始まり、それから10年の月日が経過した。

長い戦いだったが、それでも結果的に『プレデター』を崩壊に導く事には成功した。

そして残されたのは莫大な財産と——虚無感。

端的に言うのならば、「これから俺、どうすれば良いんだ？」だった。

生涯の敵だと思っていた敵がこんな短期間で滅びるとは思ってもみなかった。

無計画だと思われるかもしれないけど、だけど『プレデター』の規模が分からなかったし、それ以上に戦いに没頭するのもなんだかんだで楽しかった。

だが、それも終わってしまった。

『プレデター』は滅び世界は平和になった。

良い事なのだろう、これは。

ヒーローが必要にならないのはとても良い事だ。

無職、万歳。

それで、俺はしばらく前世と同じくオタク生活を送っていた。

ヴァーチャルアイドルの配信を見たり、アニメを見たり。

……そしてそれではさしてどうしようと思った時、俺はピンと来たのだ。

そうだ、喫茶店をやろう。

幸い財産は余るほどにあるので喫茶店を一つくらい建てるのは造作もない。

黒字に届かなくても、問題のない財産だ。

だから趣味で開いても大丈夫。

前世では「アルバイトの子に「これじゃあこの店潰れちゃいますよー」とか言われながら喫茶店を経営したい」とか思っていたが、まさか異世界でその夢が叶うとは思わなかった。

ともあれ、喫茶店『猫の夢』はオープンした。

今では美味しいカルボナーラが食べられる店として、結構こちら辺では有名になっている。

……ただ、一つ問題があった。

「……ちよつと茜。そういうのは閉店後に」

「えーっ、良いじゃん減るものじゃああるまいしいー」

二人のアルバイトの女の子が、人のいない店内でイチヤイチャしている様子を見せられているのは何の拷問だ？

最初の出会い

俺が喫茶『猫の夢』を開いてから数週間が経過した。

客の出入りはまちまちで、気持ち空いている時間の方が多いといった感じか。

俺が最初にイメージしていた「如何にも潰れそうな喫茶店」からは若干違うが、それでも暇な時間が多いのでスマホでゲームをして時間を潰している。

今のところ俺一人で動かしているが、いずれ「潰れちやいますよー」って言ってくれようなアルバイトを募集した方が良いかもしれないな。

暇だったとしても、一人だけで動かしているというのはあまりにも不自然だし、ていうか繁盛期が仮にやって来た時に客に迷惑を掛けてしまう。

しかしその場合、お給料はどれくらいが良いだろうか？

要相談で人によって見合ったお金を出したい気分だが、それだと絶対に人はやって来ない。

とはいえここで最低賃金1500円とか書いたらどうなってしまうか。

人が来てくれるか、あるいは警戒してだれも来ないか。

どちらだろう。

迷った末、結局最低賃金1400円で要相談と書いて張り紙を店の外に張り付けておく事にする。

一体いつ頃になったら募集の子がやってきてくれるか、一応こちら辺には近くに学校があるので学生が募集に釣られてやって来る可能性はある。

あるいは、一応その学校にもある程度恩があるので、校長にさりげなくそのような話を通してみるのもありかもしれない。

なんにせよ、今日は雨が降っているので誰も来ないだろう。

わざわざ傘を差してくるような店でもないし、あるいは雨宿りで入って来る奴がいるかもしれない。

そう言う時の為にフリーで提供出来る生姜スープを用意しているのだが、今のところこれを振舞った事はない。

美味しいのに、残念。

なんて、思っていたら。

からん、ころん。

店の扉が開かれる音が聞こえた。

「ごいっしや——」

なんかずぶぬれでかつ、血痕が付着した制服を着た女の子が立っていた。

「……」

お客さん、如何にも非日常の住人って感じの見た目っすね。

例の学校の生徒なのか、その制服を着た少女。

銀色の長髪で緑色の瞳をしている。

童顔だが、しかしその下にある胸はとても豊満だった。

……若干だけど、硝煙の匂いがするな。

銃か？

いやでも、こんな小さな子が銃の匂いを漂わせ——ブレザーの上着に隠してるな。

まあ、今はどうでも良い。

「はい、これ。タオルを使ってくれ」

俺は近くに置いてあった乾いたタオルを彼女に差し出す。

それに対し、少女は驚いたような表情をする。

「聞か——ないの？」

「ん？」

「私がおか、聞かないの？」

「あー、それ。長い話か？ だとしたら風邪ひくかもだから、まずはちゃんと身体を拭い

てからにしてくれ。シャワー室を貸しても良いし、着替えも一応あるにはある」

アルバイト用に用意した奴だけだな。

そう言う俺に彼女は小さく「こくり」と頷いて見せる。

とはいえ、シャワーは使わないだろうとは思った。

その場合、絶対服に隠された銃を見られると思うだろうし、俺だったら絶対にその危険を冒したくない。

という訳で沢山のタオルを用意して服を含めて拭かせて、その間に飲み物の生姜スープを提供する。

「ほれ、飲みな。美味しいから」

「ありがとう……」

ふーふー、と冷ましてからゆっくりとカップに入ったスープを飲む。

思わずと言ったように「美味し」と口にする彼女に俺は内心ガッツポーズをする。

「そうか、美味しいか」

「うん。とても身体が温まる」

「自慢の奴なんだけど、全然飲んでくれる人がいなくてさー。君がそう言ってくれてとても嬉しいよ」

「……その」

彼女は店内に張られていたアルバイト募集のチラシを見、俺に尋ねてくる。

「アルバイト、募集しているの?」

「ん? ああ、そうだな」

「それは、私みたいな子でも、大丈夫?」

「いや、それは大丈夫だけど」

「私、それに応募しても良い?」

その言葉に少しだけ躊躇する。

というか、厄介事を持ち込ませなくなかった。

しかしここで断ったら彼女が危険な場所に飛び出していきそうだったので、俺はしばらく思考した後「……問題ない、けど」と答えるしかなかった。

「それじゃあ、試しにしばらくこの制服を着て働いてみるか?」

「うん——あ」

「どうした?」

「迎田茜」

彼女はうつすらと微笑んで言う。「私の名前、だよ」

久方ぶりの戦い

ざーざーと雨が降っている。

おおよそ外出できるような天気ではなく、だということにも拘らず彼女——迎田茜は姿を現した。

彼女が何故こんな天気の中外出していたのかはすぐに察しがついた。

彼女が通っているであろう学園——向風学園は特殊な場所だ。

あそこは一般には超お嬢様学校として通っているが、その実態は違う。

真実は『アンノウン』対抗戦士育成施設として設立された極めて物騒な機関なのである。

『プレデター』が壊滅した事によりその役割は失われたと思われていたが、しかしこの様子だとどうやらまだちゃんと機能しているみたいだ。

『アア、そうだな岸波。獲物の匂いがぶんぶんするぞ』

……俺の相棒も言っている。

『アンノウン』だ。

どうやら迎田茜は『アンノウン』と交戦し、そして敗走したらしい。

そしてそいつは今、この店の外を徘徊している。

店に侵入してくる合理性がない訳ではないのか、はたまた抵抗を警戒しているのか、どちらにせよ、このままではいかないだろう。

「茜ちゃん。ちよつと俺、外に出るから」

傘を手に取り外に出ようとする俺を彼女は「え、え！」と驚いた様子を見せる。

「だ、ダメツ！」

「大丈夫大丈夫、すぐに帰って来るから」

「いやでも、いや。ほらっ！ 雨が降ってるし」

「野暮用だから、すぐ帰って来るって」

強引に言い、それから留守を任せるように言いつけついでこないようくぎを刺す。

そして傘を差して外に出て50メートルもしないうちに——奴は現れた。

それは黒い人型をしていた。

手足が長く、まるでカマキリの様だ。

実際、その手には巨大な鎌が握られていて、そこからはぼたぼたと血が滴っている。

それは何かを切りつけたからなのか、あるいはただの「そういう」ものなのか。

どちらにせよ、ここで仕留めるしかない。

「頼むぞ、ラブラス」

『ああ、分かつてる』

俺の影から飛び出してきたもの。

——ラプラスブレイドを構え、俺は柄についているトリガーを、引く。

『c a u t i o n !!』

『c a u t i o n !!』

『c a u t i o n !!』

真っ赤な文字が描かれたホログラムが周囲に浮かぶ中、警告音が鳴り響く中、俺は思い切りラプラスブレイドで空間を切り裂き、叫ぶ。

「変身つ!!!」

姿が、変わる。

影の中から赤と黒の光が飛び出し身体を包み込む。

そして姿を現したのは——一体の戦士。

ラプラス。

かつて『プレデター』を滅ぼしたヒーローがそこにいた。

……俺がラプラスと呼ばれる者である事を知っているのか知らないのか。

あるいはそんな事に意味を見出していないのか。

その人型『アンノウン』は咆哮を上げ、猛スピードでこちらに突っ込んでくる。

鎌の切り裂き攻撃を避け、俺は肉薄して拳をその胴体へとぶち込んだ。

ラプラスパンチ——などと安直な名前は付いていない。

ただこの肉体は俺と契約している『アンノウン』にして転生チート能力——ラプラスから常時供給されているエネルギーを100パーセント運動エネルギーに変換している。

そのパンチ力は一撃でトラックを粉碎し、ちよつとした家を半壊させる事が出来るほど。

そしてそれをもろに食らった『アンノウン』は身体をよろめかせ、そして膝をつく。

それでも俺より身長が高いのだから、驚きだ。

『さあ、とどめだ岸波』

「……ああ」

俺はラプラスブレイドの引き金を二度連続して引く。

するとラプラスブレイドの刃からぼたり、と一滴の赤い雫が零れ落ち、地面に落ちる。

——そこを中心に真つ赤な亀裂が走り、それは『アンノウン』の元へと走って行き、そ

してその身体に触れた瞬間『アンノウン』の身体にもその線が巡る。激しく痙攣するが、動けない。

完全に行動を停止した『アンノウン』に俺はゆっくりと近づき。そして、右回し蹴りを全力でお見舞いする。

『ラプステイック・フィンニッシュ！』

——蹴りが直撃した瞬間、赤い亀裂が激しく点滅し、そして次の瞬間『アンノウン』の肉体が破裂する。

飛び散った肉体は影に溶け、そして完全に消えてしまう。

後には何も残らない、それが『アンノウン』の最期だ。

『よし、終わったな——久方ぶりの戦いだっただのに、まるで歯ごたえがなかったなア』
「歯ごたえがある方が問題だ……それより、奴らは一体なんだ？ 『アンノウン』を使役する『プレデター』は俺達が潰した筈なんだが」

『それこそ俺の知った事じゃないな。それより、早く帰ろうぜ？』

「そう、だな」

早く帰らないと、茜ちゃんに不審がられるかもしれない。

俺はまず傘を拾って差し直し、それから変身を解く。

そしていつも通りに平然とした顔で店に戻り、そして扉を開けるのだった。

「あつ、店長さん！」

「おう、ごめんなお待たせしちゃって」

「いや……その、心配だったから」

「ちよつとお使いしてきただけだから、そんなに心配する必要ないよ」

俺はカラカラ笑い、それから彼女の姿を見る。

……どうやら俺がいない間に着替えをしていたらしい。

『猫の夢』の制服、黒と白のチェック柄のスカートにブラウス。

うん、似合っているな。

ところで、着替えはどこに仕舞っているのだろうか？

「その、着替えは洗面所に置いておいたので、その。勝手に乾燥機を使うのは失礼かって思ったから」

「うん。乾燥させておくから、乾くまでその服を着て待っててくれ。それか、使い方教えるから自分で乾燥機を使ってみる？」

「ううん、お願いします」

素直にそう言うてくるので、俺は頷き洗面所へ向かい彼女の衣服を乾燥機へと投入する。

……汚れは既に落ちていた。

特に血痕とか。

さては、そういうのを落とすための道具も持ってたんだな？

多分そういうのも含めてどこかに隠したんだらうけど、一体どこに？

「ま、そこら辺は首を突っ込むところじゃないか」

そう思い直し、俺はとりあえず目の前の衣服を乾燥させるために電源を入れるのだつた。

迎田茜という少女

向風学園所属、二年生。

迎田茜。

彼女は現在、学園の中でもエリート中のエリートしか入れない事になっている『プライド』学科に在籍している。

そこでは主に『アンノウン』との戦闘訓練の他、普通の傭兵としての戦闘訓練も行われている。

傭兵と言っても行うのはあくまで保安を目的とする事が多い。

なのでボディガードという表現する方が妥当かもしれない。

そんな彼女、迎田茜は『プライド』学科からかなり浮いている。

あまり笑わず口数も少ない彼女は、友達が誰一人としていなかった。

……戦士を育成する組織とはいえ、所属しているのはみなティーンエイジャーの女の子達。

彼女達も年頃の女の子のように話す事は大好きだし、そして空気を読まず黙ってばかりいる奴に気を掛けたりするほど暇ではなかった。

彼女も彼女で独りぼっちでいる事には慣れっこだったので、だからいつも教室で一人きりになっている状態を甘んじている。

成績はトップクラスなのがまた問題の種として教師達は頭を悩ませている。

もつと協調性を持ってもらいたい。

だけどそれを押し付けて成績を落とさせてしまう訳には……みたいな感じらしい。

「……ふーん？」

俺はラプラスのフィールドワークによって集められた情報に目を通し、深く頷いた。

ちなみにラプラスはご褒美としてアプリコットジャムとバターとホイップクリームがたっぷり乗ったパンケーキを食べに行っている。

当然、人間に扮してだが。

そして俺は一人寂しく自室にこもって彼女の情報を改めて整理する。

迎田茜。

17歳、女。

向風学園の秘蔵っ子にして秘匿された女の子。

……どうやら人為的に天才を創り出すプロジェクト、『アーカーシャ』計画に参加した女の子の一人らしい。

ちなみにそのプロジェクトとはあるヒーローが介入する事によってなかった事に

なったのだが。

「ただ、既に行われていた実験に関してはノータッチというか手の施しようがなかった。」

その一人が、彼女だった訳だ。

「うーん、という事は彼女に関しては俺の責任でもあるのか？」

何とも言えない。

彼女が俺に見せたあの笑顔、作り笑いには見えなかったけど、だけど学園では一切笑わない子らしい。

どっちが本物なのだろう。

学園で笑わない理由と、俺の前で笑った理由。

どちらも分からない。

分かるのは、彼女にもいろいろと事情があると言う事。

……それを探ったりするほど、俺は彼女と仲良くなった訳じゃない。

「んー……」

兎に角、現状は彼女にはアルバイトとして働いてもらう事になっている。

現在、日曜日の朝10時。

彼女は1時ころやって来る。

本来ならば最初は3時間の勤務時間でやってもらうつもりだったが、彼女はいきなり7時間働きたいとの事なので、とりあえずは6時間働いて貰う事になった。

まあ、そもそもとして人がまず来ない喫茶店なのでぶつちやげゲームとかで遊んで貰っていても構わない訳だが。

「おはようございます、店長！」

からんからん、と扉が元氣よく開かれて満面の笑顔を浮かべた迎田茜ちゃんが姿を現す。

俺は「おう、元氣だな」と挨拶をし、着替え室の方を指差す。

「とりあえず、まずは着替えてきてくれ」

「了解です！」

これまた元氣な返答だ。

普段全く笑わない子だとは到底思えない。

ま、辛氣臭い表情でいられるのもそれはそれで困るので、こちらとしてはありがたい。とはいえ、だ。

「あんまり元氣に笑顔を振りまいてると疲れるから、適度に気を抜いてな」

そう言っておく事にする。

それに対し茜ちゃんは背中で答える。「分かってます」

本当に分かっているのかどうかは分からないけど、ともあれ本人の言葉を信じるしかない。

そして、彼女が姿を消したころ、そこで唐突にラプラスが帰って来る。

『よお、ただいま』

「ん」

『あいつ、迎田茜だっけ、か？ すげー顔してたぜ？』

「ん？」

『すげー無表情。お前に見られてないって分かったから、あんな表情だったんだろうなア』

「……」

つまるところ、それならばどちらかというが無表情が素なのか？

だとしたら、やはり本当に笑顔を浮かべられるような相手が出てきて欲しい、なんて思ったり。

とはいえ彼女が『プライド』学科の戦士である以上、それはなかなか難しいか。友達、いないみたいだしな。

逆に、ここでアルバイトとして働こうと思ったのもしかしたら彼女が何か変わろうとしている何かなのかもしれない。

だとしたら、応援しないとな。

給料も弾ませよう。

「着替えてきましたー、店長」

と、彼女が戻って来る。

元気で結構だし、制服も似合っている。

「おう、それじゃあ机を拭いて来てくれ」

「りようかーい」

「それが済んだら、奥で休んでくれて良いからなー。何ならテレビとか見ても良いし、置いてあるゲームもやって良いから」

「えー、私この時間に見ても面白い番組がないのは知ってるし、ゲームもやった事ないからなー」

「何事も挑戦だよ、茜ちゃん。折角だからゲーム、やって見なよ」

「……あいー」

少し困ったように頷き、それから机を拭きに向かう彼女。

その後ろ姿を見ながら、俺はとりあえずコーヒー豆をぎりぎりぎり挽いていくのだつた。

「そういえば、店長」

「んー?」

と、そもそも少ない店の机をあつという間に拭き終えた茜ちゃんが太ふきを持ってこちらに帰って来る。

「お店、全然人がいないですけど。何時くらいが混むの?」

「いやー、ぶつちやけこの店が混む事はないね」

「え、?」

どういうこつちやという表情をする彼女。

「それ、大丈夫なんですか?」

「まあ、何とかなってるよ」

「……人が来ないと、潰れちゃうんじゃないの?」

「そうだねえ」

なんか、思ってた通りの会話が出来て凄く嬉しかった。

これだよこれ、こういう会話がしたかったんだ。

「満点を上げよう、茜ちゃん。給料アップだ」

「え、何故に?」

「ではなくて、そうじゃなくて茜ちゃん。暇ならさつきも言った通り従業員室で遊んでくれて構わないからね」

「いえいえ、こうして店長と話しているのが一番楽しいから」

「なるほど、若者らしい」

「ですかー」

「だなー」

なんか、毒にも薬にもならない会話になってきている。

それもまた彼女に必要なものだと思つたので、特に止めはしない。

ただ、こちらも後少少で30のおっさんなので、若者の会話に付いて行けるかどうか心配だった。

ちよつと、手加減してくれよ？

「茜ちゃんって、何か好きな食べ物ってあるのかな」

「食べ物、ですか。一番好きなおかずはやっぱりカツレツですかねー」

「おっ、豪快だ」

「で、好きなスイーツはパンケーキです。最近ほら、これを食べに行つたんだー」

と、彼女はポケットからスマホを取り出し写真を見せてくれる。

なんか、見覚えのあるアプリコットジャムとバターとホイップクリームが山ほど積まれたパンケーキだった。

こんなもん食つたんか、こいつら。

鉄の胃袋か？

あるいは甘いものは別腹とでも言うのだろうか。

女の子の摩訶不思議な肉体の特徴である。

「美味しいの？」

「さあ？」

「へ？」

「ただ、なんかバズっているパンケーキだったので食べに行っただけで、味は二の次だった」

「ええ……？」

「ま、美味しかったけどね。ただやっぱり量が量だったから、最終的にお持ち帰りしたんだ」

「こういうお菓子ってお持ち帰り出来るんだ……」

衝撃の事実だった。

そんな便利なサービスをしてくれるお店あるんだと思っただが、しかしカロリーで人をぶっ殺すぜと言わんばかりのスイーツなのでそういうのももしかしたらあるのかもしれない。

「結局三日かけて食べ切ったな」

「三日も掛かったんか……」

そしてそれを一日の短期間で食べ切ったラプラスは傍から見てどうだったのだろうか？

それもそれで少し気になるのだった。

「……それにしても、本当に人が来ないね」

と、それからしばらく話し込んだのちに、彼女が思わずと言ったように呟く。

実際問題、3時間が経過したが誰一人として客が来ない。

……全く人が来ないというのも珍しく、ちよつと寂しい。

「いつもこうなんですか？」

「いや、いつもは二時間に一人か0人って感じ」

「それじゃあいつも通りって事なんだ……」

「そうとも言う」

「暇、だね」

「だろ？」

「こんなんじやこの店、潰れちゃうんじやないですか？」

「そうだなあ」

やっぱりその会話に行き着くんだなあ。

俺は苦笑いを浮かべて頷くのだった。

ワンマンアーミー

コンテンダーという銃がある。

単発式のシングルアクションの銃であり、何より特徴的なのは小口径のライフル銃で扱うようなサイズの弾丸を撃ち出す事が可能であるという点だろう。

当たり前だが、ライフル銃で扱うような弾丸にはそれを前方へと押し出すための火薬が大量に詰め込まれていて、だからこそ反動はとてつもなく大きい。

そうでなくてもその造形上かなり扱いが難しい銃であり、だからコンテンダーをただ強力な弾丸を撃ち出す事が可能な銃として実戦で扱うのはほぼ不可能である。

それを大前提として——向風学園『プライド』学科所属の少女、迎田茜が扱う銃は大口径の銃だった。

巨大な銃身にそれを支える持ち手とぶつちやけこれ普通に鈍器としても使えるんじゃないやねって感じのオーダーメイドバレル。

彼女はその愛銃の事を『プラスチック』と呼んでいる。

それに関しては本人が付けたのではなく、作った人間がそう呼称していたのでそのままそれを利用しているだけだが。

一撃撃つだけで肩が持つていかれそうなほどの反動が発生する銃を、彼女は難なく扱える。

それは恐らく——彼女が人工的に作り出された天性の戦士であるが故だろう。

『アーカーシャ』プロジェクトでは薬物を用いたり、物理的な施術で人間の肉体を改造し、あるいは内側に『モノ』を埋め込む事もある。

とはいえ迎田茜は極めてナチュラルな肉体で、成人男性を大きく超える身体能力を誇っている。

それはもしかしたら怪物と取られるかもしれないものだった。

だから戦士としておおよそ年頃の女の子とは比較にならないような身体能力を持っている『プライド』学科の中でも、特に彼女は浮いている。

いや、本人が望んで浮いているのだろうか？

彼女は自身の特徴に対して自覚的であり、だからこそそんな自分がこの場所にいても良いのかと懐疑的であった。

だけど、だけどだ。

「……」

彼女の素は、あくまで年頃の女の子であり。

笑顔を浮かべて笑い合いたいと思っている事は、間違いないのだ。

だけど、出来ない。

笑えない。

笑ったら、人間との距離が縮まってしまふから。

そうしたら、自分がその人を傷つけてしまふかもしれないから。

だから、笑わない。

……そういう意味で、何故自分はこの場所喫茶店『猫の夢』では笑えているのかに
ついては、

(どうしてだろう……?)

分からなかった。

安心する場所である事は変わらない。

ここでは自分が力を振るう必要がなく、だから自然と笑えるのだろうか？

いやでも、無理に笑ったりはしない。

店長——岸波さんがいる時、必要最低限笑っている。

我ながら省エネな奴だなど思ってたけど。

「うーん……」

学園の寮で悩む。

……悩んでも答えは出てくる事は、ない。

だからしばし悩んだのち、彼女は気分転換に寮の外に出る事にする。散歩の時間だ。

気配を消して誰とも出会わないように足音を消し、こっそりと。

そして外に出て初めて「んー」と気を抜く。

さて、どこに行こうか。

と言つても、行くところは1か所しかないかもしれない。

「猫の夢」へだ。

そんな訳で行き先は決まり、そこへ向かって歩き出す彼女だったが。

.....

「.....」

彼女の鋭い嗅覚が、どこからか火薬の匂いが漂ってくるのを感じる。

一体、なんだ？

もしかして向風学園の戦士——通称ヘイローが戦っているのだろうか？

いやでも、そういった情報は伝わってきていない……

茜は上着に隠してある銃『プラスチック』を確認し、再び気配を消して匂いの元を探す。

幸い、匂いの元は近くにあったのか、そちらに進めば進むほど匂いは強くなる——
そしてそれは、近くにある小型の公園にあった。

「!!!」

一人の少女が、『アンノウン』に襲われていた。

覆い被さるように『アンノウン』が黒髪の少女の上に乗っかっている。

それに対し少女は藻掻いてそれから脱しようとするような仕草を取っていた。

「……………」

茜は素早く銃を取り出して『アンノウン』を攻撃する。

ターン、ターン、ターン。

サイレンサーで消音されているが、それでも結構な銃声音が響き渡る。

元々弱い奴だったのか、はたまた弱っている奴だったのか、装填されている弾丸をすべて吐き出すころには『アンノウン』は実体を保っていられなくなり、消滅する。

茜は急いで少女の元へと急ぐ。

「……………」

意識は、ない。

ただ、それよりも気になるところがあった。

「あれ……」

彼女のネクタイに付けられたバッジ。

それは学校の授業で習った『プレデター』のマークが記されていて――

からん、ころん。

「店長、ちよつと理由を聞かないで、兎に角この子を匿ってくれない!？」

謎の少女A

迎田茜ちゃんが運び込んだ黒髪の少女をベッドに寝かせた俺はとりあえず本人に尋ねてみる事にする。

「この子、何者なんだい？」

「知らない、けど。倒れてたから連れて来たの」

「ふむ」

茜ちゃんが何かを隠そうとしている事は分かる。

この子との間に何かあったのだろうか？

知り合い——だとしたらこうしてここに連れてこずに間違いなく学園へと運び込む筈だ。

訳アリ、つまり学園を頼れないとなると、もしかすると『アンノウン』関連の人物、だろうか。

そう思うのは、微かに少女から『アンノウン』の気配を感じるからだ。

『ビンゴだ、岸波。こいつン中に一体、俺の同族がいるぜエ』

「……」

ラプラスが言うのならば間違いない。

彼女は自分と同じく体内に『アンノウン』を飼っている。

だとしたら、何者だろうか。

普通に考えるのなら『プレデター』の関係者、だろうか。

しかしあそこは俺が潰したし、だとしたら残党？

まったく別の組織の人間だとしたらもうどうしようもない。

ただでさえ『プレデター』を潰すのにも面倒臭かったのに、これからまた新しい組織を潰すとなると正直もう手を出したくない。

向風学園の連中に丸投げしたい気持ちでいっぱいだ。

とはいえ、そうなると茜ちゃんみたいな女の子達が一杯駆り出されて犠牲になる可能性があるので、やっぱり俺が出るのが一番安全で手取り早いのだが。

うーん、難儀難儀。

……そう思っていると、少女が小さく「うう」と唸ってから、うつすらと眼を開く。

ゆるゆると開いた瞳は夢心地であり、どうやらまだ現実と夢との間を行き来しているみたいだ。

しかしすぐに意識が現実に戻って来たらしく、俺と、そして茜ちゃんの方を見て困惑した表情を浮かべる。

「あな、た。達、は？」

「ん……やっぱり知り合いじゃないのか」

「拾ってきただけだから」

「との事だけど。君、名前は？」

俺の問いに対し、彼女は何か答えようとして——固まる。

「名前……」

「答えられないのかい？」

「分かり、ません……分からない、どうして——思い出せない」

見るからに狼狽える彼女を見、俺は「うーん」と腕を組んで唸る。

どうやらその様子を見るに彼女は記憶喪失のようだ。

嘘を吐いているようには見えないし、事実なのだろう。

しかしそうなると困った。

彼女が何者なのか、どこに所属しているのか分からないとなると、こちらも手の施し

ようがない。

「まあ、良いや。とりあえず名前とかそういうのは置いておこう——とりあえず、これ。

飲んでくれ」

俺はあらかじめ持ってきていた、既に少しだけ冷めている蜂蜜入りのミルクティーを

彼女に渡す。

それをおぼろげと受け取った彼女は警戒しつつ口をつけ、それから「……甘い」と少しだけ頬を緩める。

身体の強張りも少し弱まったみたいだし、リラックスしてくれたみたいだ。

「んで、だ。君——えーっと、なんて呼べば良いんだろ」

「A子ちゃんとか？」

「……恵美ちゃんと呼ぶ事にするけど、良いかな？」

「は、はい」

俺の提案にひとまず了承してくれる少女——恵美ちゃん。

「恵美ちゃんは多分自分でも分かっている通り、記憶喪失みたいだ。だから現状帰る場所もないし、向かうべき場所もない。そうだね？ 分かる事があつたら、教えて欲しい」

「……はい、何も思い出せません」

「それなら、しばらくうちにいると良い。家賃とかは取らないから、しばらくはこの部屋を自由に使つてくれて良いからね」

「良いん、ですか？ ……どうして？」

「困っている人がいたら、手を差し伸べる。それは当然の事だろう？」

ウインクしようとも思ったが、しかし良い年した殿方がやる事ではないと思い、やめ

ておく事にする。

代わりに茜ちゃんに「それじゃあ、とりあえず俺達は部屋を出ようか」と提案し、一緒に部屋を出た。

ぱたん、と扉が閉まった事を確認し、彼女に言う。

「という訳だから、彼女の事はひとまず気にしなくても大丈夫だから」

「その——良いの？ 何も聞かなくて」

「大丈夫——と、根拠なしには言えないけどね。だけど、君達子供が困っているのだとしたら何かしてあげたいって思うのが大人なんだ」

「……一応、私も毎日顔を出す様にします」

「学校の方は、大丈夫なのかい？ 君達学生の本業は学校なんだから、あまり無理はしないように」

「シフト以外でもこの店に来るって事だよ」

くすくすと笑う彼女。

それからちら、と恵美ちゃんのいる部屋の方を見、それから俺の方を見た。

「あの」彼女は少し躊躇した後、俺に尋ねてくる。「怪我をしている生き物を見つけた時、それが処分対象である外来種だった場合、店長はどうしますか？」

これまた直接的な質問をしてきたな。

俺は目をぱちくりさせてから、答える。

「この世に、間違はなく殺して良いと断言出来る生命体は、いないよ。その上で、その生き物をどうするか考える、かな?」

「そう、つか」

「理想論だとは思うけどね」

「ううん、きつとその答えはとても正しいと思う」

ふー、と彼女は息を吐き。

それからこつと笑う。

「それじゃ、店長。私は一度、学園の方に帰るよ。何かあったら、メールして?」

「ああ、分かった」

頷き、彼女が店の外に出るのを見送る。

完全に見えなくなったところを見計らい、ラプラスに尋ねる。

「で、恵美ちゃんの内体にいる『アンノウン』は彼女に対して友好的なのか?」

『さあな? 今のところ害するつもりはない、ていうか意識がないように見えるぜ?』

「そうか」

『狸寝入りを決め込んでいる可能性もなくてないけどなア』

「その場合は、頼むぞ」

『ああ』

ひとまずラプラスとの会話を終え、それからもう一度恵美ちゃんのいる部屋に戻る。彼女は相変わらずベッドの上で手持無沙汰にしていた。

まあ、やる事ないだろうししょうがないだろうな。

「その——」

「とりあえず、身体の方に異常はない、かな？」

「あ、はい。身体の方は、元気です」

マッスルポーズを取って見せる彼女を見て苦笑する。

「それは良かった。それでこれからの事なんだけど、君にはこれからこの家の人間として活動をして貰う訳だが。とりあえず食事とかは一緒にして貰うとして、日中は一人でいて貰う事が多いと思う」

「それは、どうしてですか？」

「ここ、実は喫茶店なんだよ。まあ、いつも閑古鳥が鳴いているけど、だけど一応開けない訳にはいかないからな」

「それなら」

彼女はおおよそと提案してくる。

「私も、アルバイトで良いですから働いても、良いですか？ 流石に置いて貰っているの

に、何もしないというのは申し訳ないです」

「んー。俺としては助かるけど、大丈夫なのかい？」

「はい、元気ですから」

「そう言う問題でもないんだけどな」

再びマツスルポーズをする彼女。

とはいえやる気は十分みたいなので、俺はしばし考えたのちに「じゃあ、ちよつと制服を見て貰おうか」と提案するのだった。

「それはそうと、当たり前だけどこの家には女ものの衣服というものが無いから、買ってくる必要があるな。幸い明日は休日だし、茜ちゃん——さっきの子と一緒に買い物に行くと良い。お金の事については、余裕があるから安心してくれ」

「そんな、こんなに尽くして貰っているのに、その上お金も出してもらうなんて——」

「そこら辺は、今後働いて貰うから、前借りしているって事にしておいてくれ」

ウインク。

そしてやってしまったと思ったが、しかし彼女は「くすり」と笑ってくれたので、まあいつかと思う事にした。

「ウインク、出来てませんね」

「お、おう……」

どうやら出来ていなかったらしい。

二人のアルバイト

そんな訳で気づけば二人の美少女アルバイトが働くようになった訳だが。

「全然人、来ませんね」

恵美ちゃんがそう呟くように、いつも通りお店に人は来なかった。

閑古鳥がカーカー鳴いている。

俺としてはいつも通りなので別に何とも思わないのだが、しかし恵美ちゃんにはやはり困惑と危機感を覚えたらしい。

「……大丈夫なんですか、これ。立地とか、悪いんでしょうか」

「立地に関しては、まあ、悪いみたいだな。穴場スポットになっているとも言おう」

「ひ、人が来ないと不味いんじゃないですか売上げ的に」

「そうだなー。まあ、そこら辺は気にしなくても大丈夫、アルバイト代はちゃんと出せるから」

「一体どこから出てるんですかそれは……」

「不思議だよねー、本当に」

うんうんと頷いて見せる茜ちゃん。

「こんな売れない喫茶店なのに提供する料理は一級品だし、手を抜いていない。だからリピーターは確かにいるっちゃあいるけど、だけど常に来ている訳ではない、と」

「確かに料理は美味しいですよ。カルボナーラ、大好きです」

「カロリー爆弾だけどねー。ヘルシーなカルボナーラが食べたい」

「それはもはやカルボナーラじゃない。カルボナーラはカロリーをこれでもかかってプチ込んでこそカルボナーラなのだよ、君達」

「……ヘルシーなスパゲティも献立に入れてください」

「映えるなら私は何でもいいかなー」

「……女性が好みそうなパスタに関しては、今後考えておくよ」

フルーツトマトとか使った冷製のスイーツスパとか、良いかもな。

爽やかな甘さとするスパゲティとか珍しいだろうし、色合いも綺麗だから『映え』る。

ただ、そうなるとやはりどこで仕入れるのかが問題になって来るだろう。

ちやんと、持ってきてくれるだろうか。

からん、ころん。

と、そう思っているとタイミング良く、あるいは珍しく店の扉が開かれ客が入って来る。

「いらっしやいませ」

「お、おく。話しに聞いた通り、可愛らしいアルバイトの子が入ったじゃないか、岸波」
「なんだお前か」

入って来たのは知り合いだった。

頭が若干可哀そうな事になっている男性、名前は左藤太郎。

偽名じゃないかと思われるかもしれないが、一応本名である。

「何しに来た」

「飯い食いに来たんだよ。ここ、喫茶店だろうが」

「冷やかしいじゃないなら、良い。いつも通り、ナポリタンで良いのか？」

「いや、たまにはカルボナーラ食いたいかなって」

「……デブるぞ？」

「運動すれば問題ないさ」

そう言う割に彼の腹は年相応に出てきている。

「まあ、俺は別に良いんだけどさ」

俺は厨房の方に引き籠り、それからパスタをゆで始める。

カルボナーラは結構簡単に作れるから好きだ。

茹でて、ベーコンを炒めて、卵や複数のチーズと絡めれば完成、それでおしまいなのだから。

滑らかな味わいにする為に日本人は生クリームを入れる場合が多いが、俺は基本的に入れない。

そっちの方が美味しい気がするからだ。

……肉の脂が透き通った餡色になったのを確認しつつ、それをボウルに投入。くるつと絡め始めよう。

そして、そんな様子を恵美ちゃんがぼけーつと見ていた。

「上手ですね」

「慣れてるからな」

「……あの人とは、どのような関係なんですか？ 知り合い、みたいですけど」

「腐れ縁の友人、かな？」

正確に言うのなら『協力者』と表現するのが正しいのだろうけど。

そこら辺は彼女に伝えるべき情報ではない。

あんな見た目でもかつては『狂犬』と恐れられていた傭兵だったなんて事も、知る必要はない。

「よし、出来た。それじゃあ、持って行ってくれ」

「はい」

お盆にカルボナーラを載せ、それを持っていく姿を俺——そして茜ちゃんは見守る。

すっかりしたものでまだアルバイトを始めてから数日しか経っていないのに熟練のアルバイトみたいなの貫禄が出ている。

もしかして記憶を失う前は名高いアルバイトだったのだろうか？

いや、名高いアルバイトってなんだ？

「どうぞ、ご注文のカルボナーラになります」

「おう、ありがとうございますお嬢ちゃん」

一礼し、こちらに戻って来る。

「……久しぶりに仕事した気がします」

「それは重畳」

「ていうか、気づいたんですけど、茜、スマートフォンを弄っているんですけど大丈夫なんでしょうか？」

「ああ、うん問題ない。一応死角の場所で見えないところで弄っているから——恵美ちゃんにもスマホ渡したんだから、それ使って隠れて遊んでも良いぞ？」

「……仕事中は止めておきます」

真面目だなー。

俺としては茜ちゃんくらいゆるっとした感じなのが良いのだが。

「……」

なの、だが。

恵美ちゃんは何やら茜ちゃんの姿を見て何かを気づいたらしい。

首を傾げ、それから「ちよつと、茜？」と割かし軽い感じで尋ねに行つた。

「茜、暇なら机とか拭きにいつたりしたらどうですか？」

「……え、今スマホ弄るのに忙しいんだけど」

「いや……でも。弄つてないじゃないですか」

「……」

一瞬。

茜ちゃんの表情が固まったような気がした。

……すぐにいつも通りの笑顔に戻り、それから「いやだなー」と茶化す様に言う。

「ソシヤゲの周回で脳みそ死んでたからそう見えただけだよ、恵美」

「……人が見ていないんですから、無理に笑う必要はないと思いますよ？」

「い、いやあ」

表情が引き攣っている。

明らかに笑顔が変な感じになっている。

「わ、私はいつも笑顔花丸子ちゃんだから、笑顔でいるのが好きなの」

「……？」

「と、兎に角机だねっ！ 拭いて来ようかなっ！」

慌てたように台拭きを手に取り、宣言通り机を拭きに行く茜ちゃん。

その姿をキョトンとした表情で恵美ちゃんは見つめるのだった。

俺ははーと溜息を吐き、それからさりげなく恵美ちゃんに言う。

「恵美ちゃん」

「あ、はい。なんででしょうか」

「……その、な。人間誰しも意味のない行動を取るって事はないんだ。意味がないって思えても、本人には何か意味がある事がほとんどなんだよ」

「ふ、うん？」

「だから、意味がなさそうって思っても本人にとつては重要な意味がある場合があるの
で、そこを突っ込んでやるのは野暮ってものだから、出来るだけ止めておくように」

「はあ……？」

よく分かっていような分かっていないような、そんな相槌。

そんな彼女の様子に俺はどうしたもんかと内心頭を抱えるのだった。

もしかしてこの子、鈍感キャラか？

「おう、岸波。美味かったぞー」

と、そこでしっかりとカルボナーラを食べていた左藤がこちらに声を掛けてくる。

「おう、どうだった？」

「美味かったよ、いつも通り」

「そりやあ良かった——と、それでだな。これからちよつとメニューに女性が好みそうなものを追加しようと思っっているから」

「ああ、仕入れの相談だな」

「頼むぞ、出来るだけ安く仕入れたいから」

「それじゃ、今度改めて話し合おうか」

じゃあな。

手を振り踵を返し、からんころんと扉を押し開き姿を消す。

そして再び客のいなくなった店内で、気づけばアルバイトの二人の姿がなくなっていた。

「……あれ？」



「その、ごめんなさい」

恵美は茜にそう謝る為に一度店内の奥へと本人を連れてきた。

そうやって頭を下げ謝罪をする恵美に茜は「はあ」と嘆息する。

「良いよ、別に。実際私もソシヤゲにやりがいを感じている訳じゃあないし、所詮暇潰しだったから」

「そう、ですか？」

「だけど、笑顔に關してはちよつとあれかな。笑顔は、人に見られているのならば浮かべておくべきだと思うし」

「疲れませんか？」

「疲れるかどうかは問題じゃないよ」

「そういう問題だと思います、けど。それに笑顔って、そんな義務感で浮かべるものですかね」

「……それも、そうだね」

どうやら自分と彼女では価値観が違うらしい。

いや、この場合素直に笑顔を浮かべられない自分の方が問題なのだろう。

恵美の疑問と提案は多分正しい。

だけど、それでも。

「笑顔を浮かべたいって思っていないと、私はちゃんと笑えないから」

「……なら、私の前では別に笑ってなくても良いですよ。疲れるでしょうし、疲れる事を

しているのを見ていると私も疲れますから」

「どうして?」

「どうして、と言われましても」

困ったような表情をする恵美を見、「ああこの人はこういう人なんだな」と理解を深める茜は一度、表情を消す。

人には見せない、無表情な顔を。

それを見、恵美は「ふむ」と深く頷いた。

「別に、無表情でもカワイイじゃないですか」

「な……っ」

「大丈夫です、そのままでもみんな、嫌ったりしませんよ。マスターだつてきつとカワイイイって言ってくれます」

「て、店長は関係ないでしょっ!」

顔を真っ赤にする彼女にますます「可愛いものになあ」と呟く恵美。

「も、もう良い。私店の方に行くからっ!」

「あ、待つてくださいいっ!」

どすどすと歩いていく茜を追う恵美。

傍から見ればとても仲の良い友達同士だった。

それぞれのお話

「……」

向風学園のパソコンルームにて、迎田茜はパソコンのキーボードを叩いていた。

彼女が調べているのは『ブレデター』に関してのアーカイブ。

しかしどれだけ電子の海を潜ってみても、見つかるのは教科書に載っているような内容のみだった。

数十年前から設立され、『アンノウン』と呼ばれる生物兵器を開発、使役した組織。

そしてそれに対抗するために作られたのがこの学園。

「だけど……」

どうも、違和感がある。

向風学園のカリキュラムに関してだ。

向風学園は数年単位で計画を練り、それに従ってカリキュラムを作っている筈である。

そしてそもそもとして『ブレデター』に対抗、解体するために存在しているこの学園が、今もなお存在しているのは何故だろうか。

いや、学園は今ではただの保安組織として生徒を育てている事は分かる。

『プレデター』の事も、あくまで過去の事象として紹介する事も分かる。

ただ、カリキュラムには『アンノウン』と対峙した時の戦闘方法、および座学も組み込まれている。

既に『プレデター』がなくなっているのにも拘らずだ。

『アンノウン』は今も存在しているのは間違いない。

それに関しては学園に確認しても「そうだ」という答えが返ってきた。

事実あの日、学園からの出撃要請を受け、『プライド』学科の生徒達数名で『アンノウン』討伐に当たった。

しかし、結果はというと。

「……」

いっ・つ・の・間・に・な・な・か・つ・た・事・に・さ・れ・た・。

学園からは一方的に緘口令が言い渡され、見た事聞いた事をすべてなかつた事にされた。

それに対し生徒達は不思議がりつつもいつもの事だと忘れようとしていて、そして茜もまたそのうちの一人だった。

だが、彼女は2度、遭遇してしまった。

恵美と名付けられた記憶喪失の少女。

彼女を襲っていた『アンノウン』。

一体どういう事だろう？

彼女はたまたま『アンノウン』に襲われていただけの——な訳がない。

だって彼女は『プレデター』のバッジを付けていた。

だから間違いない。『プレデター』の関係者なのは間違いない。

だとしたら——

「まだ、『プレデター』は」

残っている？

秘密裏にまだ行動をしている？

そしてそれを、学園は隠している？

どうして？

謎は尽きないが、しかしこれ以上調べてもしようがないと思えばパソコンを閉じようと

した茜は——

「……………」

そこでふと、指が止まる。

パソコンに表示されていたのは1枚の写真。

衛星写真だろうか、真上から『アンノウン』が撮影されている。

どうやら複数人のヘイローが戦っているみたいだが——彼女が注目したのはそこではない。

近くのビルの屋上。

そこに、小さな黒い影が滲んでいる。

……滲んでいる。

何も無いところに、黒い影がある。

なんだろう、これと彼女は首を傾げつつ目を凝らして正体を確かめようとする。

「これ——っ！」

次の瞬間だった。

写真が、消去された。

——上層部の管理権限を持つ者が操作したのは間違いない。

だが、逆に言うのだ。

いま、自分が目撃してしまった何かは重要な情報な筈だ。

見てはいけない情報だったとも言おう。

そしてそれを上層部は何も言っていないだろう。

むしろ、消してしまった事を後悔しているかもしれない。

だって、それをしたら「それが重要な情報だと伝える事と同義」なのだから。
「ふう……」

なんにせよ、この情報が何に繋がるかは今のところは定かではない。
だが、この学園は何かを隠している。

カリキュラムの不自然さ、潰滅しているか分からない『プレデター』。

そして——恵美という少女。

「恵美……」

彼女は一体、何者なのだろう。

あの綺麗な笑顔を浮かべる少女の正体を、自分は知らなくてはならない。

もし仮に、その先に非情な最期が待っていたとしても。

「……」

その場合、自分はその手段を取る事が出来るだろうか。

——不思議と「そうだ」と断言する事は、出来なかった。



「それじゃあ、『プレデター』は」

左藤太郎とスマホで連絡をした俺は最低限の情報を彼から伝えられる。

『ああ、間違いなく残党が残っているな。向風学園の上層部もそのように動いているし、それ以外の下位組織も現状怖がって静まり返っているよ』

「そう、か」

『お前は どうする。見て見ぬ振りは、出来ないよな?』

「ああ、少なくとも知人が巻き込まれている可能性が高いからな」

あの日、迎田茜と遭遇した日。

少なくともあの『アンノウン』はハグレのような雰囲気ではなかった。

何者かの意思で現れ、彼女を襲った。

そもそも『アンノウン』のハグレというものが存在しているのか、俺には分からない。少なくとも『プレデター』がわっしょいしていた時代はみな統率が取れていて、すべてを討伐したい俺にとってはとてもありがたかった。

「こうなると面倒になって来るな。完全にこっちとしては後手に回るしかない訳だし、風潰しにしようとしても時間が掛かる」

『今のところ、奴らがどこに潜んでいるのかは不明だ。だから間違いなく残っている連中は少数なんだろうけどな』

「まあ、大人数なら間違いなくもっとハッスルしているだろうし、痕跡を残すだろう」

『ただ、お前の話した『プライド』学科のヒーローを襲った『アンノウン』が一体どういった意図で現れたのか、それについては何となく分かったぜ』

「分かったのか」

『その日、複数体の『アンノウン』が発生していて向風学園のヒーローが対処に当たっていたらしい。そしてお前が倒したのは、その指揮個体だったみたいだ』

「あー、道理で見覚えがあつた筈だ。昔よく倒したよ」

『そしてその『アンノウン』の下位個体は、何かを探しているような仕草をしていたらしい。だから一般ヘイローでも対処できたとも言えるが』

「何かを探していた、ねえ……？」

『心当たりがあるのか？』

「ないとは言えない」

現在俺の店にいるあの子か。

体内に『アンノウン』を飼っているという少女。

奴等は一体彼女で何をしようとしているのか。

あるいは、彼女は連中から逃げてきた？

記憶喪失だから分らないし、そしてその記憶喪失も何者かに仕込まれたものの可能性もある。

「……こうなると、やはり消耗戦だな」

『昔と違うんだ。『プレデター』の残党達も大人しく虎視眈々と機会を伺っているし、派手にドンパチする時代ではないんだろうよ』

『もう一度聞くけど、物流から探る事も無理か』

『ああ、完全にステルス状態。多分あらかじめ予備で貯めていた資材をやりくりしているんだろうが、その内無理になって飛び出してくる。ゴキブリみたいな』

『こうして『アンノウン』が出没している以上、その時は案外近いかもな』
『それもまた、間違いない』

その時、この世界にヒーローは必要か。

どちらにせよ、俺は今すべき事をするまでだ。

店と、店に連なる人々を守る。

それだけの事。

「マスターっ！」

っと、そこで階下から声が聞こえてくる。

恵美ちゃんの声だ、何かあったのだろうか？

「——という訳だから、また何かあったら連絡するよ」

『ああ、俺もまた暇になったらカルボナーラ食いに行く』

「新しい献立を作るから、その試食に来てくれ」

『後ろ向きに善処する』

通話が切れ、俺はスマホをポケットにしまい階段を下りる。

「どうしたー?」

「ご、ゴキブリがいた気がするんですけどっ!」

「……」

衛生面はしっかりしている筈なのに、もしかしたらいるかもしれないゴキブリというのはとても恐ろしかった。

裏のお話

「ふんふん♪」

恵美は一人で店内の掃除を行っていた。

現在店は準備中で店長の岸波は2階で自室に籠って何やらしている。

そして友達迎田茜は学校に行っているの、現状彼女は独りぼつちの状態だった。

その事に疑問を抱く事はない。

そもそもこうしてこの店に置いて貰っていること自体が奇跡なのだし、それ以上を求めるのは傲慢だと恵美は考えている。

それに、別に独りぼつちと言っても2階には店長がいるし、待つていれば友達はやつて来る。

だから孤独を感じた事は一度としてなかった。

ただ……

「うーん……」

小さく唸る。

時折、彼女は思うのだ。

自分は一体何者なのか、と。

記憶を失っている自分は果たしてどこからやってきたのか、何を目的としていたのか。

少なくとも何もないとところからいきなり現れた筈はない。

間違いなくどこかに出発点はある筈なのだ。

だけど現状、それを探る糸口は一つとしてないし、だから今は状況に流されるままにいるしかない。

だから今日もこうして台拭きで机を拭いていく――

「……………ん？」

と、そこで彼女に視界に何か黒いものが映った気がした。

あれ、もしかしてゴキブリ？

彼女の背筋に冷たいものが走る。

恐る恐る恵美は顔を横へと持っていき、そして視界に映ったものを確認する――

「……………え？」

そこにいたのは、黒い人型だった。

天井すれすれになるほど大きな巨体、非日常の存在を目の当たりにした彼女は思わず

悲鳴を上げそうになる。

いや、違う。

悲鳴を上げるべきだ。

悲鳴を上げて、助けを求めろべきだ。

しかし、助けが来たとして、例えば店長がやって来たとして、この黒い人型の餌食になつてしまうのが――

「起きろ、セカンド」

その言葉は彼女の脳みそを激しく揺さぶり、思わず頭をぐつと抑え蹲る。

……そして次の瞬間、頭を上げた彼女の瞳には、今まで茜や岸波に見せた事がない光が宿っていた。

「……おはよう、グリード」

「おはようだ、セカンド」

ぱちぱちと眼を瞬かせ、それからちらりと視線を上へと向ける。

「マスターが来る前に、手短かに私を起こした理由を教えてください」

「いやなに、お前が記憶を失っている時、今まで見た事のないほどに楽しそうにしていたからな」

「……そんな事の為に私を起こしたのですか？」

「そんな事とはなんだ。今、まさにお前は人生を楽しんでいる。それを見た私の気持ちを考えてみる。嬉しくて吐き気がして来る」

「……いや、貴方吐く事ないですよね？」

「比喩表現と言う奴だ——どうだ？　ここで一つ、いつその事連中を裏切つてここで働き続けると言うのは——」

「駄目」

人型、『アンノウン』のグリードの言葉に彼女は小さく首を横に振る。

「私は、お父さんの命令に逆らえない。逆らいたくない」

「それはお前が恐怖で支配されているからか？」

「……そんな事、ない」

「セカンド——いや、恵美。私はお前の幸せを何より願っている。だから、お前が組織を裏切ると言うのならば、それに全力で従うぞ？」

「……出来ないです、私は。お父さんを裏切るなんて事、出来ない」

「恵美……」

「だから、私は」

ふー、と息を吐き。

それから彼女は吐き捨てるように自身の使命を口にする。

「向風学園の生徒、その『プライド』のヒーローを殺す」

「……………そう、か」

「ねえ、グリード。私、そもそもどうしてこんな事になっているのですか？ 確か私は『アンノウン』を率いて向風学園に向かっています。その途中、指揮個体と逸れて、それで」

「暴走したんだ。そして暴走した『アンノウン』の攻撃に巻き込まれて、それでお前は意識を失った。そこをあの少女、迎田茜に拾われて、結果今、こうしてこの店にいるんだ」
「茜には感謝しか出来ません。でも、その途中ヒーローの連中とは遭遇しなかったのですか？ ここの、一応向風学園の管轄下にあると思うのですが」

「…………いや。あの迎田茜は一般人だし。そして彼女がお前を運ぶ途中も、そういった人物とは遭遇しなかった」

「なる、ほど」

うん、と頷いて見せる彼女。

「それじゃあ、しばらくはこの店に居続けるしかないですね」

「ずっと居続けても良いんだぞ？」

グリードの言葉に対し、今度はしっかりと首を横に振る彼女。

「マスターにも、茜にも、迷惑はかけられませんから。だから、時が来たら私はここを離れなくてはならないでしょう」

「恵美……」

「セカンドですよ、グリード。私はお父さんの最高傑作。お父さんの手足」

「そう、か」

「用がないなら、もう一度戻ってください、グリード。私はまた掃除に戻ります」

「……」

それに対し、グリードは返答せずに姿を霧へと変え、そしてそれは彼女の体内へと戻っていく。

……頭痛に顔をしかめる様に、頭を押さえた彼女——恵美は目を開けると「……ん？」と首を傾げる。

「あれ、私。何してたんでしたっけ——あ」

と、そこで彼女は。

視界の端に、黒い何かを見た気がした。

恐る恐る視界を横に移し、しかしそこには何もなかった。

それでも不安は消えず、だから彼女は思わず叫んだ。

「マスターっ！」

しばらくして、とんとんと階段を下りる音が聞こえてくる。

すぐに姿を現した岸波は彼女に「どうしたー?」と尋ねてきた。

「ご、ゴキブリがいた気がするんですけどっ!」

「……」

額を抑える岸波。

「……とりあえず、また見た時は報告してくれ」

「はい——その」

「ん? どうした?」

恵美は少しだけ躊躇した後、「えと」と言葉を紡ぐ。

「お腹空いちちゃったので、何か食べるものがあると、嬉しいです」

「ん……ああ、もうおやつ時間だな。それじゃあ、一緒にプリンでも食べるか?」

「はいっ」

二人で一緒に厨房の方へと歩いていく。

……その途中、恵美は何かを思い出しそうになって「ん?」と首を傾げたが、すぐにその感覚は綺麗さっぱりなくなり、気のせいだったかと思い直し、すぐに岸波の後を追うのだった。

強欲の残滓

『組織の事はさておき、研究施設は見つけたぜ！』

ラプラスに探らせていたところ、早速当たりを引いたらしい俺は早速現地向かう事にした。

当然店は閉じ、二人のアルバイトに関しては休みを告げておいた。

何でも折角だからシヨツピングに行くのだそうだ。

実に青春をされていて良き。

そんな訳で俺は『ラプラス』に変身して、ラプラスが発見した研究施設へと潜入。

場所はなんと下水道の中。

これで排水用とかだったらヤバかったが、運よくそこは雨水用の通路だった。

曲がりくねった道を抜け、そしていきなり現れた金属の扉。

そこをぶち破って侵入すると——中は聞いていた話の通り誰もいなかった。

完全にもぬけの殻である。

「……」

もしかするとここはあくまでダミーの可能性があるが、それでも何か情報は残されて

いないかと探してみる事にする。

とはいえ重要そうなものはすべて持ち去られているようだ。

だが、相手は相当急いでここを出たのだろう。

少なくとも計画的にここを脱した訳ではない事は、様々な研究道具がそのままになっている事からも分かった。

ただ、俺は専門家ではないのでそれらが何に使われていたのかはさっぱり分からなかった。

これは左藤の奴に頼るしかないな。

そう思つて取り合えずこの場を後にしようかと思つた、その時だった。

「……………ん？」

躓きそうになり、首を傾げる。

一面汚らしい絨毯が敷かれているが、躓く場所があつたか？

……………もしかしてと思い、俺は絨毯をすべて剥がしてみる事になると、どうやらビンゴだつたらしく隠し収納を発見する。

さて、ここにも何もなかつたら本格的にこの場所を後にしないと。

そう思いながらそこを開けてみると——一束のレポートだけが残されていた。

「……………収穫はこれだけ、か」

少し落胆しつつも、一体何が記されているのだろうと思いつながら中身を確認して見る事にする。

「プロジェクト『グリッド』？」

レポートに記されていたのはその研究概要についてだった。

端的に言うとう、俺みたいに『アンノウン』と人間を融合させ、新しい戦士を生み出すといった研究だった。

それには制御装置か、あるいは知性を持つ『アンノウン』の創造が必要不可欠であり、そして今回のプロジェクトでは制御装置によって『アンノウン』を封じ込め、融合する事にしたらしい。

とはいえ『アンノウン』は特注のものを製造し、そしてそれに適合する人間もまた特注で『製造』したらしい。

『製造』。

一組の親から生み出すのではなく、フラスコの中で遺伝子を合わせ人工的に生み出された人間——通称『ファースト』。

彼女は研究通り『アンノウン』との融合に成功。

そして最終的に戦場に投入して『ラプラス』——つまり俺にぶつけるつもりだったらしい。

「……だけど？」

しかし、その途中で『ファースト』は『プレデター』の意図しない行動に出る。

脱走、そして失踪したのだそうだ。

その原因は定かではないが、しかし最終的に『ファースト』は向風学園付近で姿を消したらしく、だから恐らくは——

「……」

最終的にプロジェクト『グリード』は凍結。

そもそも人間を生み出したところでその人間を『アンノウン』のようにコントロールする手段がなかった。

人造人間には縁というものがなく、そして無垢であるが故に縛り付けるものが少ない。

……調教を施す手間を考えるのならば、安価に『アンノウン』を大量に生産した方がよっぽど良い。

そういった理由が重なって、よってプロジェクトは闇に葬られたのだそうだ。

「なる、ハズル」

その『ファースト』の事はさておくとしよう。

しかし、彼女——恵美ちゃんの間違いなくプロジェクト『グリッド』の関係者だろう。彼女はもう少ししようもなく俺とラプラスに似ていた。

その内面が、である。

「だとしたら、まだ続いているのか？」

組織がなくなった後も、何者かが独断で。

『ファースト』を最初に生み出された人間だとすると、『セカンド』や『サード』がいるのだろうか？

いやでも、人間を人為的に生み出すのには相当な機材とそれを納める為の施設が必要
な筈。

だとしたらプロジェクトによって生み出された人間は少数、だと思いたい。

「そうなる、彼女がどこまで出来るのか、って事だよな」

『直接聞いてみたらどうだ？』

「……どうやって」

ラプラスは答える。

『俺の力ならば、中にいる奴を強引に引き出す事も出来るぜ？』

「それで、恵美ちゃんはどうなる？」

『さアな』

「……じゃあ、それはなしの方向で行こう」

『そうかヨ。お優しい事で……ん？』

「どうした、ラプラス」

唐突に黙ったラプラスは、何やら含みのある口調で話す。

『どオやら、動きがあつたらしい』

「どういう事だ」

『俺達とそつくりの存在が、上にいる』

「……」

『プロジェクト『グリード』の戦士が、現れたみたいだぜ？』